



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3235 号 2016.9.4 発行

パラリンピック前に障害者スポーツ体験する催し ロンドン



NHKニュース 2016年9月4日

リオデジャネイロパラリンピックの開幕を前に、障害者スポーツへの関心を高めようと、ロンドンのオリンピックパークでは車いすテニスなど、さまざまな競技を体験できるイベントが開かれました。

このイベントは、4年前のロンドンパラリンピックを機に毎年開かれていて、市の東部にあるオリンピックパークには3日、車いすテニスや陸上など20を超

える競技が体験できるコーナーが設けられました。

大勢の子どもたちも参加して障害のある人たちと一緒に汗を流し、車いすバスケットボールを長く続けているという男性は、「障害がある人もそうでない人も、一つになれるこうしたイベントはよいことだと思います」と話していました。

また、友人と一緒に車いすテニスを体験した少年は、「これほど体力を使い、難しい競技だとは思っていませんでした。リオデジャネイロパラリンピックでは、車いすテニスにも注目します」と開幕に期待を示しました。

4年前のロンドンパラリンピックでは270万枚のチケットが売れるなど、イギリスでは大会をきっかけに障害者スポーツへの関心が高まったとされており、イベントの主催者は「これからも障害者スポーツへの関心を持続させ、障害者の社会参加の機会につなげていきたいです。東京パラリンピックもきっと成功を収められると思います」と話していました。



パラ難民選手チーム入村式 ダンスの歓迎に笑顔で感謝

共同通信 2016年9月4日

入村式に臨む難民選手チームのシャハラッド・ナサジプール（左から3人目）とイブラヒム・フセイン（その右）ら=3日、リオデジャネイロ（共同）

リオデジャネイロ・パラリンピックでリオ五輪に続いて結成された難民選手チームの入村式が3日、リオ市西部パーラ地区の選手村で行われ、内戦が続くシリアからギリシャに逃

れた競泳男子のイブラヒム・フセインと、イラン生まれで米国に在住する陸上男子円盤投げのシャハラッド・ナサジプールがそろって参加した。

式典では緑の衣装をまとったダンサーの踊りで熱烈な歓迎を受けた。難民選手チームに選ばれ「長年の夢が現実になるなんて信じられない」と語っていたフセインは笑顔で喜びをかみしめ、パラリンピック旗が掲揚される様子を感じ深げに見つめた。数年前に爆弾で右脚の一部を失い、五輪の夢は断念したが、苦難を乗り越えて障害者スポーツの祭典で思

いを実らせた。

最後は一緒に入村式に臨んだフランス選手団らとダンサーが入り乱れて陽気に踊る感動的な光景に。ダンス合戦を楽しそうに見つめたナサジプールは「素晴らしい式典だった」と感謝した。

2人は選手村に宿泊し、開会式では先頭で入場行進する。

介護や看護の現場で働く外国人の日本語スピーチ大会 NHKニュース 2016年9月4日



介護や看護の現場で働いている外国人が仕事で感じたことを日本語で発表するコンテストが都内で開かれ、慣れない日本語を使って介護の現場で働く苦労や施設の利用者との交流のエピソードなどが披露されました。

このコンテストは、EPA＝経済連携協定に基づいて介護福祉士や看護師の資格を取得するために来日した外国人に日本語の研修を行っている団体が毎年開いているもので、書類審査を通過した10人が都内の会場に集まりました。

このうち、インドネシア人のファウジアトゥンニサさん(23)は、去年日本に来たばかりのころは日本語で会話ができず、施設の利用者から「もう来るな」などとののしられたものの、それがきっかけで自分に何ができるのか考えることにつながり、「自分自身を省みる大切なことを教えてくれた」と話しました。

また、徳島県で働くフィリピン人のサリグンバ・メリーアン・バンザリさん(29)は、当初は方言が分からず苦労したものの、利用者に励まされて今ではやりがいを感じていると方言を交えてユーモラスに話しました。

EPAでは、インドネシア、フィリピン、ベトナムの3か国から介護福祉士や看護師を目指してこれまでに3800人以上が来日していますが、実務と日本語を同時に学ばなければならないことから試験に合格して実際に働いているのは450人ほどにとどまっています、介護や看護の現場の人手不足を解消するには至っていません。

民生委員制度100年の足跡 記念冊子発行

河北新報 2016年9月4日

宮城県大河原町の民生委員児童委員協議会が発行した冊子



民生委員制度が来年100周年を迎えることを記念し、宮城県大河原町民生委員児童委員協議会は、会の歴史をたどる冊子「つなぐ」を発行した。住民の支援に奮闘する委員が体験記を寄せ、自分たちが果たす役割を見詰め直している。

女性委員の一人は、地域で孤立していた親子の家を定期的に訪問し、徐々に心を開いてもらえるようになった事例を紹介。「高齢者でも障害者でもなく、福祉からも身内からも遠い人たちを誰が心配して手助けしてあげるのか」と記した。

別の女性委員は、通っていた1人暮らしの高齢者から「苦しい」と電話を受け、119番通報後に自宅に駆け付けた経験談を披露した。後に高齢者は「119番を思い出せなかった」と涙ぐみ、赤いボールペンで委員の電話番号を書いた手帳を見せてくれたという。

冊子ではこのほか、東日本大震災後に実施した支援や、小学校の下校時に通学路を見回る活動、1人暮らしの高齢者に「救急安心カード」を配る取り組みを説明している。

冊子はA4判、96ページ。タイトルは、委員が住民と行政をつなぐ役割を果たしていることから付けた。

協議会は1983年に発足し、現在の委員は54人。大沼忠会長（71）は「委員の活動の過去と未来をつなぐ冊子になればうれしい」と話す。

300部作り、委員や元委員、関係機関に配った。残部もあり、希望者に無料で配布する。連絡先は町民生委員児童委員協議会0224（53）0294。

<台風10号>ホーム運営法人 対応後手惨劇招く 河北新報 2016年9月4日

台風10号による豪雨被害で、9人が亡くなった岩手県岩泉町の高齢者グループホーム「楽（ら）ん楽（ら）ん」の運営法人は、水害に備えた避難マニュアルを作成していなかった。過去にも施設周辺で浸水被害があったものの、教訓は風化していた。自治体が出す避難準備情報は、「要援護者の避難を始める段階」との定義も職員に周知されておらず、「避難は水が来てから」という油断が大惨事につながった。

高齢者施設を設置する際の基準として、国は災害に対応した避難計画の策定を義務付けている。「楽ん楽ん」は火災想定での避難訓練はしていたが、水害の訓練には取り組んでいなかった。職員の役割分担や避難経路も決めていなかった。

水害時は、隣接する3階建ての介護老人保健施設「ふれんどりー岩泉」の2階以上に入所者を避難させることを職員間で申し合わせていただけだったという。

施設周辺では2011年秋、大雨で小本（おもと）川が氾濫。その際には入所者を「ふれんどりー岩泉」に避難させ、全員無事だった。

施設を運営する医療法人社団「緑川会」の佐藤弘明常務理事は「水が上がってきってから避難しても間に合うと思っていた」と釈明。過去の経験が油断を招いた。

施設側に防災知識が浸透していない実情も浮き彫りになった。町は要援護者の避難を促す避難準備情報を台風接近前の8月30日午前9時に出したが、佐藤常務理事は情報の定義を理解していなかった。

県社会福祉協議会の右京昌久（あきひさ）事務局次長は「高齢者施設の防災基準は火災や地震対策が中心。自治体研修会で水害に触れることはほとんどない。洪水対策は立地条件を考慮して運営者が独自で取り組むしかないのが現状だ」と話す。

熊本) 人工知能搭載人型ロボ、歌や会話でお年寄り和ます 朝日新聞 2016年9月4日



高齢者介護施設に無償提供された人型ロボットのPARLO。デイサービスの利用者を会話で楽しませていた＝熊本市北区鹿子木町

熊本地震を経験したお年寄りたちを癒やそうと、人工知能を搭載した人型ロボット「PARLO（パルロ）」（高さ40センチ、重さ1・8キロ）が活躍中だ。開発した会社が7月末から熊本市内の介護福祉施設5カ所に無償提供。高いコミュニケーション能力が特徴で、会話や歌で楽しませている。

先月31日、熊本市北区の介護福祉施設「くわのみ荘」のデイサービスセンター。通所する吉田亮子さん（85）にパルロが「いちごさん、こんにちは」とあだ名で話しかけた。100人分の顔を覚えられるほか、好きな話題なども学習しており、吉田さんには二十四節気の処暑のことを話し出した。「ソーラン節が聴きたい」とのリクエストに、踊りつきで披露した。

開発したのは、情報技術通信業の富士ソフト（横浜市）。2012年に高齢者福祉施設向けのモデルを発売し、現在、国内の高齢者福祉施設約500カ所が利用しているという。認知症の人が少しずつ話すようになるなど、変化も報告されているという。

熊本地震を受けて、励ましになればと福祉避難所にもなった施設に提供することに。くわのみ荘周辺は大きな被害はなかったというが、施設スタッフは「地震後、落ち着かない

雰囲気が続いていた」。先月31日夜と1日朝にも余震があったが、「再び表情が硬くなった方が、パルロと向き合うことで笑顔を見せていました」と話した。(柴田菜々子)

障害のないあなたへ 知事応接室を「占拠」した人々／1 28年前に「普通」願い／埼玉



毎日新聞 2016年8月31日
30日に行われた「総合県交渉」で、要望書のページを繰る野島久美子・埼玉障害者市民ネットワーク代表(右)＝県庁で

県庁に4日間、教育長に直接主張

台風10号の接近で朝から雨が降りしきった30日、さいたま市浦和区の県庁に、車いすに乗った人たちが続々と集まってきた。障害者やその家族、支援者が行政への要望を伝えるため、28年前から続けている「総合県交渉」に出席するためだ。会場となった県庁内の講堂には1000人近くが詰めかけ、約20台の車いすが並んだ。

冒頭、今回の要望書を取りまとめた埼玉障害者市民ネットワーク代表の野島久美子さん(58)＝春日部市＝がマイクを握ってあいさつし、続けて山下浩志さん(73)＝同＝がスクリーンにスライド画面を映し出した。示したのは、棒グラフ。1979年の養護学校義務化の時点から、養護学校や特別支援学校などで「分ける教育」を受けて福祉施設に入所した人が、倍以上に膨れあがった状況を表していた。

「(障害者を受け入れる)福祉施設がこれだけ増えると、お金がかかる。そうすると『(障害者は)金食い虫だ』という発想になり、津久井やまゆり園のような状況が、社会の中に生まれる」。山下さんは、社会に大きな衝撃を与えた「やまゆり園事件」を引き合いに訴えた。

知的障害のある少年の高校入学を求め、初めての「県交渉」が行われたのは1988年2月。この時、山下さんはすでに未来を予見し、県教育委員会の担当者に次のような手紙を送っていた。

<障害が重ければ重いほど、大人になってからその人のケアをやろうとすれば莫大(ばくだい)な費用がかかります。そういうムダをするよりは、義務教育で、そして高校で、さらには自治体行政の中で、共に学んだり、働いたりする関係を広げていく努力のほうがずっとたやすいはずです>

この時、結局、少年らの入学はかなわず、3カ月後には少年らやその家族、支援者が知事や教育長との面会を求めて知事応接室に居座り、4日間にわたって「占拠」する事態に発展した。この中に野島さんと山下さんがいた。

3日目の夜、ようやく姿を現した教育長を前に、脳性まひの野島さんが、車いすを使用しながらアパートで一人で暮らしてきた経験を説明し、障害者が「普通に」暮らす意義を主張した。「こんな小さなことの話で、あんたの方が、大きく大きくしちゃってるんですよ」

この「占拠事件」から28年。野島さんは「(障害者のための)制度が整って、サービスも充実したけれど『分ける』システムはなくなり、障害者は今も見えないベールに包まれている」とため息をついた。

先月26日、相模原市で障害者19人が刺殺される事件が起き、差別や偏見の問題、「障害者が生きづらさを感じない社会の在り方」が改めて問われている。県内には重い障害を持ちながら、施設入所や特別支援教育といった「分ける」システムを拒み、健常者と同様に街の中で暮らす人たちがいる。彼らが目指すものは何か。約四半世紀前に起きた「知事応接室占拠事件」を出発点に考える。【奥山はるな】

農業機械化で仕事も奪われ

1988年5月11日、車いすを先頭にした一団が、知事や教育長との面会を求め、県庁本庁舎2階の知事応接室にこもった。集まったのは中学校を卒業し、県立高校への進学を希望した知的障害のある少年3人と、その夢を後押しする家族や支援者。「知事も教育長も出てこないから待つことにした。占拠するつもりはなかった」。行動を主導した1人、山下浩志さん(73)＝春日部市＝は、ひょうひょうと振り返る。

山下さんは60年代中ごろから、医学連(全日本医学生連合)委員長として学生運動に関わった後、東京都内から春日部市に移住し、77年ごろから隣の越谷市に養護学校をつくる運動に加わった。しかし養護学校が整備されたことで普通学級に通う障害者への圧力は強まり、79年に養護学校が義務化された。

こうした流れの中で山下さんは疑問を持ち始め、78年に「障害のある人もない人も共に街に出て生きよう」を合言葉に、障害者や支援者でつくる「わらじの会」を設立した。

養護学校が義務制になっても通常の小中学校に通い続けた障害のある子どもたちが、高校に入学するはずの年を迎えたのが88年。前年の秋から入学に向けた交渉を続けていたが、入学できないままに新年度が始まってしまった。「占拠」は最後の手段だった。当時の知事は革新県政を掲げた社会党出身の畑和(やわら)氏。「簡単には排除されないだろう」との目算もあった。

4日間の占拠の意義について、山下さんは「障害者が生身の人間として、その場に存在したこと」だと考えている。知事応接室のソファは障害者やその家族、支援者で埋め尽くされ、子どもたちが跳びはねて遊んだ。

一同は「総点検行動」と称して各課を回った。駅へのエレベーター設置や、車いすでは入れないほど狭い県庁内のトイレの改善を求めた。県庁正面玄関の真上にあるバルコニーで車いすの人たちがひなたぼっこをしていると、職員が「警告書」を手に入ってきたが、結局は退散した。

知事が現れないまま迎えた3日目の夜、教育長がようやく知事応接室に来て、「(小中と同様に通常の高校への)自主通学を続けられる方策を検討したい」と回答した。

こうした運動を下支えし「占拠」にも参加したのが、障害ゆえに義務教育を受けられず、30代まで越谷市の農家の離れにこもっていた新坂光子さん・幸子さん姉妹だ。「占拠」から2年後(90年3月)の「県交渉」。ストレッチャーに横たわる姉・光子さんの語りを支援者が書き取り、県庁の壁に張り出した。

<おれらは ねんきんきり(年金しか) はいらねえ だから おやたちに みてもらってきた>

姉妹はかつて、豆の殻むきや裁縫を任せられていた。しかし農業の機械化が進むと仕事を奪われ「ごくつぶし」の存在とされた。わらじの会は、そんな姉妹が街に出て、自活できるよう寄り添った。

<いま みんなで まちにでたり はたけ やったりして がんばってる><おれらもまちで みんなとくらしたい ちじさん かんがえてくんろ>

半年後の90年9月に光子さんは急逝。その語りは遺言のように、支援者の間で語り継がれている。

■ことば 養護学校の義務化

かつて義務教育の対象とされていなかった重度・重複障害のある子どもに対応するため、国は1973年の政令で、79年4月から養護学校への就学を保護者に義務づけた。これにより全国に養護学校が整備されたが、慣れ親しんだ地域の小中学校への通学を望む子どもや保護者からは反発が起こった。学校教育法の改正で2007年4月、養護学校は盲学校やろう学校と合わせて「特別支援学校」に移行。県によると、義務化された79年度の県内の養護・盲・ろう学校の生徒数は2727人。昨年度の特別支援学校の生徒数は71

79人に達し、大きく増加している。

障害のないあなたへ 知事応接室を「占拠」した人々／3 街の「衝撃」絵日記に 車いすで車道「克己渋滞」／埼玉 毎日新聞 2016年9月2日
コンビニで買い物する橋本克己さん。弱視は進んだが、棚の位置を記憶し、手探りで購入する＝越谷市大林で



そもそも「障害者が街に出て生きる」とは、どういうことなのか。その困難さと可能性を体現してきたのが、弱視や難聴、下半身まひの障害を持ちながら自宅で暮らし、「県交渉」などの活動にも参加し続ける橋本克己（かつみ）さん（58）＝越谷市。「渋滞」と「絵日記」でその存在を街に知らしめた人だ。

橋本さんは、重度の障害で小学校を「就学免除」にされ、長屋の一室に閉じこもって暮らしていた。言葉でのコミュニケーションができず、毎日、自室に並べたミニカーを指や虫眼鏡で点検し、わずかな傷を見つけてはパニックになって暴れ出す。窓を割り、家具をひっくり返すほどの暴力に疲れ果てた家族は、施設入所を決断しようとしていた。

ちょうどその頃、1978年に障害者や支援者で設立したばかりの「わらじの会」のメンバーが訪れ、橋本さんは初めて街に出た。19歳だった。電車やバスに乗り、道行く人とすれ違うだけで、自室では感じ得なかった刺激を受けた。この「衝撃」を周りの人に伝えようと、駅やバス停の看板から字を覚え、手話を習い始め、イラストを描くようになった。パニックも次第に治まった。

世界を広げた橋本さんは1人でも街に出るようになる。しかし当時、車いすで通ることができるのは車道しかなかった。しかも雨水を排水するため、道の中央を高くして両端は斜めに傾けてある。端が危険なため、結果的に車いすで真ん中を走るようになった。

かくして、橋本さんの自宅近くにある国道4号バイパスでは「克己渋滞」が発生した。クラクションが鳴り響いても、難聴の克己さんには届かない。タクシーの無線で「車いすのあんちゃん出現、迂回（うかい）せよ」という連絡が回った。車にはねられるなど何度となく交通事故に遭い、いら立ったドライバーに殴られる日もあったが、過酷な経験をもイラストにして「武勇伝」に変えた。

橋本さんは37歳を迎えた95年、イラスト集「克己絵日記」を出版する。その帯に、わらじの会メンバーとして橋本さんを見守ってきた山下浩志さん（73）＝春日部市＝は、こう寄せた。

<彼は決して「障害を克服」した美談の主ではない。交通渋滞の元凶であり、あたりかまわず手を借りて街に行く迷惑物体そのものであるかもしれない。しかし、そんな彼だからこそ、いないと困る。彼がいるから「みんながありのままに生きる」という社会がイメージできる>

近年、橋本さんは弱視が進み、イラストもおぼろげに輪郭をとったものになった。それでも週2、3回、ヘルパーの車に乗って、コンビニエンスストアに買い物に行く。棚の位置は頭に入っているので手探りで商品を選び、レジに財布のコインを全部出し、店員さんに必要な金額を取ってもらう。時間をかけ、店側と一緒に築いてきたスタイルだ。

今、楽しみにしているのは来年の越谷花火大会。今年は床ずれで入院して見られなかった。手話で「7・2・9」と来年の開催日を予想し、指折り数えて待っている。目に見えるのはぼんやりとした影かもしれないが、空気を揺るがす振動や火薬のにおいが、大輪の花のイメージを結ぶ。【奥山はるな】

障害のないあなたへ 知事応接室を「占拠」した人々／4 県庁に「店」20年目 成長

もたらず居場所、存続願う / 埼玉

毎日新聞 2016年9月3日

知事応接室の「占拠」が起きた1988年から続く「総合県交渉」によって、実現したこともある。その一つが1997年、県庁第2庁舎の1階に障害者団体のアンテナショップ「かっぼ」がオープンしたことだ。「スタッフの障害者は気後れすることなく、庁内を堂々と歩けばよい」。そんな意味を込めて名付けられた。

スタッフは、複数の障害者団体が日替わりで派遣する障害者が務める。お茶などの飲料や弁当、県内各地の名産品を取り扱い、庁内の各課に配達もしている。

店舗は、県庁の玄関口という恵まれた位置にあるが、その運営は「世間の風」と無縁ではない。オープンから11年後には1階下のフロアにコンビニエンスストアが開店したことで、売り上げが激減。当初は障害者らが台車に商品を乗せ、「いかがですかー」と庁舎内を巡り歩いていたが、職員から「会議中なのにいるさい」と苦情を寄せられ、廊下などでの定点販売に切り替えた。ここ数年は赤字が続き、存続に向けて寄付を募ろうと検討している。

今年が開店から20年目。店には当初、主に障害者が施設や作業所でつくったパンやクッキーなどの「授産品」を置いていたが、各団体が地元で販路を開拓したため、現在はお茶などの飲料が売り上げの中心となっている。

それでも、福祉団体の職員をしながら7年前から専従の店番を務める板倉真紀さん（36）＝越谷市＝は、「かっぼ」が存続する意義を感じている。さまざまな障害がありながらも、仕事を通じて変わってゆくスタッフの姿を見てきたからだという。

例えば、ある発達障害の男性の場合、知り合った10年ほど前は、あいさつしても反応してもらえなかった。店舗と一緒にいると、不意に髪の毛を引っ張られることもあった。だが、板倉さんが休みを取っていた日の日誌には、自分に見せたことのない姿が記されていることがあった。

「ぶんちゃかぶんちゃか言いながら、ジュースを飲んでいた」「ソファで昼寝して一日が終わった」。普通なら「不真面目」で片付けられてしまうことだが、板倉さんは「人間味あふれる人柄」に興味をそそられた。

周囲との関わりによって、男性も徐々に率先して準備や片付けをするようになった。そして、帰りには「さようなら」とあいさつするようになった。

スタッフの魅力にひかれるのは、板倉さんだけではない。店を訪れる県職員もしばしば「久しぶり」「今日は張り切ってるね」などと話しかけてくれる。板倉さんは「自由気ままに、時にはぐっすり昼寝してしまうような姿が県庁の風景の一部となり、いつしか周りの人を和ませていた」と話す。

「すぐに仕事を覚えて『かっぼ』から巣立ち、社会に出て行く人もいるけれど、長年かけて変わっていく人もいる。それは生産性や効率性が重視される組織の中では、そもそも認められていないこと。でも、そこに大切なことがあるような気がする」。板倉さんは、「かっぼ」の存続を切に願っている。【奥山はるな】

障害のないあなたへ 知事応接室を「占拠」した人々／5止 「分ける」制度、今も 組織や個人をつないだことに意義 / 埼玉

毎日新聞 2016年9月4日

知事応接室の「占拠」から丸20年がたった2008年、日本ボランティア学会の学会誌に「マツリのようなたたかい」と題した論文が掲載された。執筆者は、当時9歳の少年として「占拠」に立ち会った猪瀬浩平さん（37）＝さいたま市＝だ。

猪瀬さんの兄は知的障害者で、地元の小中学校に通い、県立高校への入学を希望した当事者。小学4年だった猪瀬さんも両親に連れられて県庁に行った。

「占拠」3日目の夜、父良一さん（67）＝同＝が、知事応接室に現れた教育長らをたずねる様子、関係者らのニュースレターに記録されている。

＜（県立校への入学を希望し「占拠」に加わった）3人の子供たちは氷山の一角。他に

も高校浪人を強いられている子、やむを得ず養護学校に行っている子は多い。同世代の子供たちが、どう地域で育っていったら良いと思うか>

父ら当事者の両親の険しい表情や、ずらりと並んだ車いす、聞き慣れない言語障害の人たちの声が、浩平さんの記憶に焼き付いた。

「占拠」について振り返るようになったのは、大学3年の頃。「障害者を、従来と違う問題意識で捉えたい」と考え、大学院に進んで研究することにした。兄らの働く場を作るため、父が1999年に開いた「見沼たんぼ福祉農園」を手伝うようになり、家族の歴史と向き合い始めた。

浩平さんは「占拠」の意義として、「あらゆる組織や個人をつないだこと」を挙げる。身体障害者と知的障害者。「教育」を求める子どもの障害者と、「福祉」を求める大人の障害者。県庁と市民。新住民と旧住民。「占拠」から3年後の91年には、さまざまな団体が協力して「埼玉障害者市民ネットワーク」を設立し、毎年「総合県交渉」を続けるようになった。要望は「さべつ」「くらし」「はたらく」「まなぶ」など多岐にわたり、暮らしの全てを包み込む。

現在、浩平さんは明治学院大の准教授（ボランティア学）を務める。知り合いの障害者を授業のゲストに招いたり、父の開いた農園に学生を連れていったりしている。同大4年の山口裕二さん（24）も農園に赴いた1人。入学間もない頃から通い、泊まり込みのキャンプにも参加。農園で知り合った自閉症の男性の介助も始め、日常的に障害者と接するようになった。

山口さんは「健常者とされる人にも意思疎通しづらい人はいるし、健常者と障害者の間に、あまり隔たりは感じない。浩平先生も含め『面白い人が居る場所』だから農園に来ている」と話す。

相模原市で先月起きた「津久井やまゆり園」事件で、容疑者が「役に立つ人間」と「役に立たない人間」を分けるような供述をしていると知り、改めて嫌悪感を覚えた。『役に立つ』『役に立たない』で分ける人たちは、実は多いと思う。こんな事件が起こるような世の中であってほしくない

「占拠」というセンセーショナルな出来事を経ても、施設入所や特別支援教育といった「分ける」システムはなくなる。それでも「障害のある人もない人も共に」という理想は、今も静かに裾野を広げている。【奥山はるな】

相模原殺傷、植松容疑者を5日再逮捕 犠牲者全員分を立件 共同通信 2016年9月4日

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺され27人が負傷した事件で、神奈川県警津久井署捜査本部は5日、施設西棟に入所していた男性9人を殺害したとして、殺人の疑いで元施設職員、植松聖容疑者（26）を再逮捕する。植松容疑者は既に東棟1階に入所する19～70歳の女性10人に対する殺人容疑などで逮捕されており、3回目となる今回の逮捕で犠牲者全員分が立件される。捜査本部は今後、負傷した入所者に対する殺人未遂容疑で追送検する方針。横浜地検は今後、刑事責任能力の有無を見極めるため、鑑定留置を請求する見通し。捜査関係者によると、7月26日未明、西棟の1階と2階に居住する41～67歳の男性9人の首を刃物で刺して殺害した疑いが持たれている。植松容疑者はこれまでの調べに対し容疑を認める一方、「誰をどのくらい殺したか覚えていない」などと供述。障害者に対する差別的な主張を続けている。捜査本部は、最初に侵入したとみられる東棟の一室に入居していた女性（19）への殺人未遂などの疑いで、7月26日の襲撃直後に出頭した植松容疑者を逮捕。翌27日、殺人容疑に切り替え送検した。8月15日、女性9人殺害容疑で再逮捕した。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行